

(仮称)

ゆきのさと自由が丘通信

《2020年4月、小学校開校をめざして》

認定 NPO 法人北海道自由が丘学園・ともに人間教育をすすめる会 / 「自由な小学校」をつくる会
札幌市豊平区月寒東 1-15-5-11 ☎(011)858-1711

「きのくに」堀真一郎さん講演会の反響など

先日、道新の9月5日と10月15日の記事、「ゆきのさと自由が丘通信」創刊号、第2号を堀さんにお礼状とともに郵送しました。メールで以下のようなお返事をいただきました。

お便りと資料、ありがとうございます。
2020年の開校目標、うまく進むように祈っています。お力になれそうなことがあったら、どうか遠慮なく申し付けてください。皆様によろしく。
堀 真一郎

11月2日の道新「読者の声」欄には以下のような投書も載っていました。

子ども主体の学校に感銘 主婦 鈴木比沙子 (札幌市北区)
10月15日の本紙朝刊道央広域面「はなし抄」で紹介された、きのくに子どもの村学園長・堀真一郎さんのお話に強く引きつけられた。
今から22年前、本紙の教育面に「試験も校則もすべてなし」との見出しで同学園を紹介するルポが掲載され、私はこの記事を大切に切り抜いて保存している。このような学校こそ、子どもたちにとって望ましい一との強い思いがあったからだ。こうした学園が25年も続いているのは大きな喜びだ。
堀学園長は講演で、同学園について「子どもたちはどのように生き、行動したらよいかを、さまざまな体験や共同生活を通じて学びます。子どもたちが自分たちでつくる学校なのです」と話している。
また、影響を受けたというA.S.ニールの「もっともよい教師は子どもとともに笑う。もっともよくない教師は、子どもを笑う」との言葉を引用しながら「子どもといつも笑い続けていられる学校でありたい」と語っている。そんな堀学園長の言葉が、ずっと私の胸に響いている。

また、11月1日の道新には、長年の自由が丘支援者である池内省子さんの意見が載っていました。

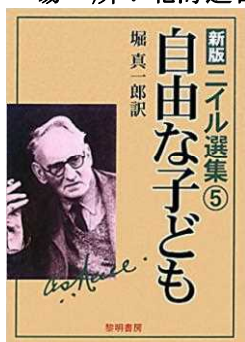
学校を安心して学べる場に 教育相談員 池内省子 (札幌市西区)
全国の小中高校などで2016年度に認知されたいじめ件数は32万3808件で、過去最多を大幅に更新した一と、報道された。特に小学校が前年度比56.8%増の23万7921件と、大幅に増えているいじめは心に深い傷を残し、不登校や自殺につながってしまうこともある。私が関わっている北海道子どもセンターで、ひきこもりの青年から聞いた話でも、中学時代に受けたいじめが原因だった。
今、学校は改訂学習指導要領の先取りなどで大変な状況のようだ。教師たちの半数が「過労死ライン」の勤務状況だとも言われる。楽しい行事は削られ宿題が増えた子どもたちは、勉強もみんながわかるまで教えてもらえずストレスがたまり、自分より弱いものに心理的、身体的攻撃を加えるいじめが増えているのではないだろうか。
教師の数を増やして1学級の人数を減らす。一人一人の子どもと教師が余裕をもって向き合い、安心して学べる学校にすることこそ、いじめ対策だと思う。

文科省の問題行動・不登校調査で分かった2016年度に国公立私立小中高校、特別支援学校が認知されたいじめ件数は、前年度比43.8%増の32万3808件と過去最多を大幅更新し、道内のいじめ認知件数は8355件と同34.8%増えた、との報道がありました。池内さんのおっしゃるとおり、子どもたちも教師たちもストレスがたまる成績競争・業務査定体制が、子どもの自己肯定感を毀損し、教師を孤立化させ果てしない焦燥感に追い込んでいると考えられます。日本の子どもたちの自己肯定感の極端な低さも国際比較で明らかにされています。それなのに、いつも文科省から打ち出されるいじめ対策は、既存の学校体制にメスを入れるのではなく、「いじめの早期発見早期対応」といういわば監視の強化と、「道徳教育の徹底」という徳目の注入強化ばかりでしかありません。いじめを利用して従順な国民づくりを進めようとしているだけです。教育を経済・企業メタファー(商品生産・効率化・収益向上など)で論じることの見当違い・一面性に気づき、子どもたちの自己肯定感が育つ真つ当な教育・学校のあり方を探求していかなければ、いじめは減るどころか潜在化するだけです。めざすべきは「自由な教育」です!

自由が丘学習会・出前説明会やります！

12月9日(土) 15:00～16:30 学習会 テーマ「ニール、デューイの思想と自由な教育」

場 所：北海道自由が丘月寒子ども館（札幌市豊平区月寒東1条15丁目5-11）



当日は、NPO 理事会後、学習会を行います。ニールやデューイの思想に触れながら自由な教育・自由な小学校のあり方を考えていこうと思います。メールアドレスがわかる方々には、すでにご連絡差し上げていますが、それ以外の方も周りにお声掛け・お誘いをして、ぜひご参加ください。



その後 17:00 頃からその場で望年会（自由が丘では毎年、忘れるのではなく新たな展望を拓くという意味で「望年会」です）も予定しておりますので、こちらも気兼ねなくご参加ください。

また、札幌や旭川の幼稚園を訪問して、自由な小学校に関心のある保護者の方々を対象に説明会・座談会を持とうと思っています。今時期を打診中ですが、関心がある、来てほしい、というような幼稚園・保育園・子ども園がありましたら、

伺いますのでお声掛けください。みなさんの周囲にご関心のありそうな方がいらしたら、どんどんお声掛け・PR してください。

書籍『こんな学校あったらいいな』から

『こんな学校あったらいいな～小さな学校の大きな挑戦～』（辻正矩ほか 2013.10.19 築地書館）から。大阪の「箕面子どもの森学園」（NPO 立の小学校、児童の原籍は公立小）のスタッフ藤田美保さんは、両親とも教師で、もっともなりたくない職業が教師だったそうです。ところが、大学で途上国支援などに関心を持ち進路に迷い、しばらくは小学校の教師でもして考えようと…。以下は抜き書きです。

…このように学校の体制や教師集団の価値観になじめなかった私が、知らず知らずの間に感覚が慣れて（公立学校の教師になってきている）と感じる出来事が起こりました。冬の時期、公立学校では体育で縄跳びが始まります。周りに合わせて、私も体育で縄跳びを子どもたちにさせることにしました。いつものように体育で縄跳びをやっていたときの事です。一人の男の子が、小さな虫を手のひらに乗せて私のところにやってきました。

「先生、ぼくの縄跳びが虫にあたってしまうと虫が死にそう……」

名前も知らない小さな虫。私には、とるに足らないものに見えました。

「あ、そうなんや。でもな、今は体育の時間やから、自分のところに帰って縄跳びしよう」

男の子は、だまったまま自分の場所に戻り、縄跳びを再び始め、それに専心した私は、虫のことはすっかり忘れられました。

体育の時間が終わり、休み時間になりました。体育倉庫に使ったものを片付け、職員室に戻っていたときの事です。たくさん子どもたちが遊ぶ運動場の片隅で、さっきの男の子がしゃがみこんで何かをしているのを見つけました。

「何してんの？」

声をかけると、その子は私を振り向きもせず、こう答えました。

「さっきの虫が死んだから、虫のお墓をつくる」

その言葉を聞いた瞬間、からだの中を電流が走ったような衝撃を受けました。（私にとってはとるに足らない虫でも、この子にとっては違ったんや。なんでそれがわからなかったんやろ？なんであのとき、縄跳びはしなくてもいいから、虫をみてあげたらって言えなかったんやろう？）そのとき私は、その子にそれ以上声をかけることも、謝ることもできませんでした。学校の体制や周りの教師の対応を批判しているにもかかわらず、自分にも知らず知らずのうちに、公立学校の教師としての価値観や振る舞いが身につけてきているのだと感じさせられました。……

その後、彼女は退職し、大学院に学びつつ子育てをして『大阪に新しい学校を創る会』に出会ったこのことです。ご関心のある方はこの本も読んでみてください。



北海道自由が丘学園 HP について

北海道自由が丘学園の HP は、つい先日まで「自由な学校づくり」のコーナーがありませんでした。先日スタッフの鈴木かおりさんが一肌脱いでコーナーをつくってくれましたので、興味のある方は覗いてみてください。お知らせ、通信やパンフ、細田の呼び掛け文章などが載っています。すべて著作フリーなので、どんどん活用・引用してください。

今後の通信について…

通信は、不定期に話題があるときに出せたらと思って始めました。ところが、何だか教育の話題は尽きず、なんとなく月刊号になっています。でもこれから間が空くときもあると思いますが、月刊ではないので悪しからず。みなさんのご意見・投稿も大歓迎です。

どうぞ細田のアドレス（hosoda.takaya@sapporo-c.ed.jp）までお寄せください。